

漫画に見る在外日本人 —アジア・アフリカ・BRICsの眼差しから—(2)

小林英夫[†]

The Overseas Japanese from Comic Books —Looking from African, Asian, and BRICs' Perspectives—(2)

Hideo Kobayashi

はじめに

1 海外日本人の3類型と3パターンの漫画

1-1 海外日本人の3類型

1-2 3パターンの漫画

2 島耕作の世界

2-1 島耕作の経歴

2-2 島耕作の交友関係

2-3 派閥

2-4 島耕作の海外活動

2-4-1 アメリカ・ハツシバ

2-4-2 フィリピン・ハツシバ

2-4-3 上海初芝電産有限公司

2-4-4 インド出張

2-4-5 島耕作の海外生活

3 『サラリーマン金太郎』の世界

3-1 金太郎の経歴

3-2 金太郎の交友関係

3-3 派閥

3-4 金太郎の海外生活

3-4-1 アフリカでの土木事業

3-4-2 アフリカでの生活

4 鴨志田穰・西原理恵子の世界

[†] 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授

4-1 鴨志田穰・西原理恵子の経歴

4-1 鴨志田穰・西原理恵子の海外活動

4-2 鴨志田穰・西原理恵子の海外生活〈以上、第 11 号〉

5 海外教育編

5-1 「大企業派」の子弟教育

島耕作がフィリピン・ハツシバに勤務した 1990 年代初頭、彼は、殺人事件がおきたマンションを引き払い、上司でビレッジに住む榎村の家の一隅を借りて住んでいたことがある。この時バツイチ男の島耕作は、海外家庭生活の一端を味あう事となる。榎村は、広い邸宅に妻と息子の 3 人暮らして、息子の翔太はインターナショナルスクールに通う高校生であった。1 人息子の翔太は勉強嫌いで、もっぱら野球、ゴルフといったスポーツに興ずる高校生活を送っていた。妻は、その点を案じているが、榎村は、翔太をゴルフに誘うなどこの点では無頓着で、夫婦喧嘩が絶えず、2 人の関係は冷え切っていた。

ところで、1990 年代に入ると、翔太のようにインターナショナルスクールに通う日本人海外子女が増えてきているという。日本の大学や高校でも帰国子女枠を設けて彼らを受入れてきているので、日本のカリキュラムで日本語・日本式の教育している日本人学校へ通うメリットが減少してきているのである。それは 2000 年代に入るとますます顕著になってきている。

そんなことで翔太は日本人学校へ通っていないが、彼が高校に進学した 1990 年代初頭、まだ多くの在フィリピン日本人子弟は通常マニラ日本人学校に通っていたので、ここではこの学校について紹介しておこう。マニラ日本人学校が設立されたのは 1968 年 6 月のことだった。はじめはマニラの日本大使館付属広報センター内に校舎を設け、教諭 3 名、生徒 72 名（小学部 62 名、中学部 10 名）でスタートした。出発当初は、日本語学習を中心に週数回の補習授業を行うというものだった。しかし 1973 年 11 月に日本企業を束ねるフィリピン日本人商工会議所が設立され、2 年半後の 1976 年 5 月にはマニラ在住日本人を中心にマニラ日本人会が結成され、フィリピン進出日系企業と日本人子弟の数が増加すると、1978 年にはマニラ郊外のバラニケアに新校舎を建設して本格的な授業が開始された。これまでのマニラ中心街のビルの真っ只中の校舎では、野外学習、生物観察はおろか体育実技にも支障をきたしていたからである⁽¹⁴⁾。

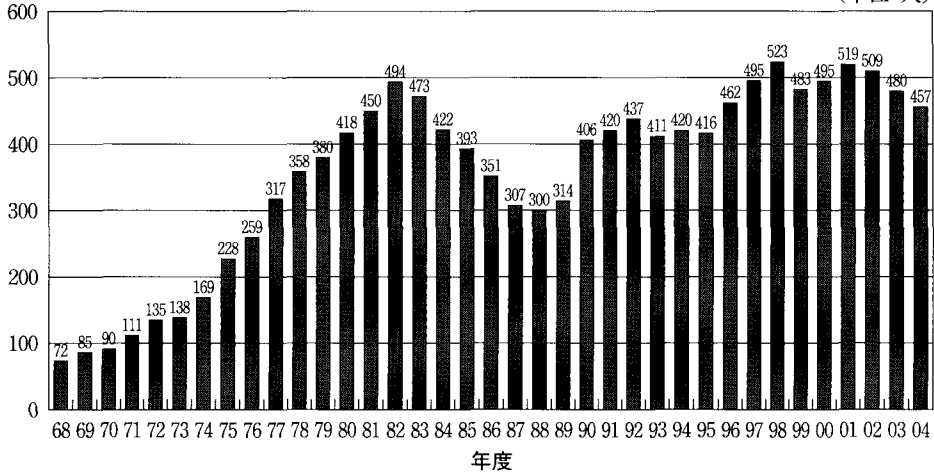
フィリピンに限らず、多くのアジア各地の日本人学校は、当初は大使館内に校舎を設けて日本語学習を開始するが、日本人会や日本人商工会議所の発足とともに新校舎を設立し、日本から教員を呼び寄せ本格的な教育活動を開始する。

マニラ日本人学校では、以降生徒数も急激に増加して 1982 年には 494 名を数えている。しかしその後はマルコス政権の動揺と政情の不安、労働運動の激発などにより進出企業数が伸び悩み、児童数も減少を開始し、1988 年には 300 名まで落ち込んだ。しかし 1990 年からは増加に転じて 1998 年には 519 名まで達した（図 4 参照）。

もっとも 1990 年代からの増加は、国際結婚によるフィリピン女性を母に持つ混血児童の入学増によるもので、彼らは、1990 年代後半になると全児童の 20% に達したという。したがって、彼らは他の日

児童生徒数の推移

(単位:人)



出所：30周年行事委員会記念誌係編『マニラ日本人学校創立30周年記念誌』1998年、86頁およびマニラ日本人学校のインタビュー情報に依る。

図4

本人児童と比較すると日本語能力が劣るので、特別クラスを設けてその対応に当たっているという。樫村翔太が入学を迎えた時期は、1990年代初めの再度児童数が増加を開始する時期に該当しており、漫画には登場しないが、おそらく内心、樫村夫妻もインターナショナルスクールに通わせるか、日本人学校に行かせるかで悩んだものと想定される。が、結果的には前者を選択しているのだ。

実際、どこも似たり寄ったりだが、海外駐在員は子弟教育の悩みは大きい。特に比較的教育システムが整備された欧米諸国と比較してアジア、アフリカ地域の場合には問題を抱える国も少なくない。フィリピンの場合には、かつてアメリカの植民地で英語圏だということもあり、英語教育が普及していることも絡んで、むしろ樫村翔太のようにインターナショナルスクールに通うものも多かったのだろう。

5-2 「中小企業派」の子弟教育

「中小企業派」の子弟教育となると、「大企業派」とはいささか異なるものがある。いささかというのは、重なる部分もあれば、重ならない部分もあるという意味である。ところで本稿で「中小企業派」の典型として取り上げた『サラリーマン金太郎』の世界では、日本人海外子弟の教育場面は登場しない。海外受注土木事業の場合には、その多くが単身赴任で工事期間にあわせて外地に駐在する場合が多いため、大手ゼネコン以外は外地に駐在員を置かないということもあるのだろうが、子弟教育の場面は漫画の世界には出てこないのだ。そこで、ここでは、再びフィリピンでの中小企業者の事例を参考までに紹介しておこう。

フィリピンでは、マニラ日本人会とは別にさまざまな理由でフィリピンに渡ってきた「中小企業者」や「転職者」を中心にマニラ会が結成されている。このマニラ会が中心になって子供学園と称する保育園や日本語補習授業を行っているのだ。正規の職員ではなく、ボランティアが保母、保父、語学教師を務めている。授業料が高いため、マニラ日本人学校に行きたくても行けない日系人の要望に応えようと

いうものである。マニラ日本人学校に通うには、小学生でも授業料や入学金を含めて最低年間 25,650 ペソ (約 53,100 円) が必要だ⁽¹⁵⁾。これと比較するとマニラ会がやっている子供学園や日本語補習塾は、入会金が 4,200 ペソ (約 8,700 円)。6 分の 1 以上の安さなのである⁽¹⁶⁾。したがって、ここには、現地で個人企業を営む日本人や離婚して単身で子供を育てているフィリピン人女性の子供達が集まってきているのである。

6 日本人会と日本人商工会議所

日本人子弟の教育問題となると、そのスポンサーである日本人会や日本人商工会議所の活動にふれざるを得ない。この組織が海外展開の「影の立役者」組織なのだが、西原理恵子・鴨志田穰『最後のアジア伝』で一度登場する以外には、他の漫画の世界には姿をみせない。ビジネスの世界を中心に描くと、どうしても会社が主体となり、その会社を支える現地日本人組織は後景に退くこととなり、見えにくくなる。しかし島耕作たちが企業買収を仕掛ける時や、逆に買収工作を退けて会社を防衛する時、漫画では島や金太郎の一人舞台になり、彼らの英雄的行動が会社を救済する筋書きになっているが〈実際そう描かなければ漫画の筋は成り立たないのだが…〉、島とて、金太郎とて、日本人会や日本人商工会議所の支援や情報提供などの直接・間接的アドバイスなくして、スーパースターとして活動できるわけではない。この辺は、地味ゆえに漫画の世界の筋書きでは後景に退き、見えにくいので、若干の補足を試みたいが、あらかじめ言っておきたいことは、実は、この日本人会と日本人商工会議所の活動にも「大企業派」「中小企業派」の複雑な思いや思惑の違い、そして熱いバトルがにじみ出てくるのだ…。

6-1 「大企業派」中心の活動

国別・都市別に海外にいる日本人を束ねているのが日本人会である。多くの場合「大企業派」のメンバーが幹部を占めている。大企業は、金もあるし人の面でも余裕がある。そして何より出発当初は、事務室や事務局員を確保しづらから、大企業のオフィスの片隅に事務所を置いてそのオフィスのスタッフを借りて活動した関係で、ある特定の大企業の出向者が幹部の座を占めることとなる。また出発当初は、どうしても政府機関との折衝が大きなウェイトを占めるので、大企業をバックにして活動する方が、好都合だった事がある。そして日本人会と並立されているのが日本人商工会議所だ。これは、海外当該地の法人企業をもって構成され、人的には日本人会と重なる部分もあるが、主に企業の要望をまとめ、現地政府や日本政府宛てに提出し、交渉を行う窓口となるのだ。

表に東南アジア各国（台湾、韓国、フィリピン）の日本人会と日本人商工会議所の役員メンバーを掲げておいた。金太郎が勤めるヤマト建設は中小企業だから別にしても、島耕作が勤めるハツシバは、大手家電メーカーだから、当然「大企業派」の典型として、日本人会会長や日本人商工会議所会頭に名を連ねている。(表 3)。

例えばフィリピンを例にとれば、1973 年設立時の日本人商工会議所初代会頭は三井物産で、二代目は東京銀行、以降は三井物産、三菱商事、伊藤忠、東綿実業など商社が名を連ねるが、1984 年から 2 年間、第 10 代会頭は島の会社（松下電器）から出ている。多くは互選で、その選出母体である理事たちは各大企業で「世襲」されている場合が多い。だから金太郎が属するヤマト建設のような日本人中小企業

表3 日本人会・日本人商工会議所役員メンバー表

表3-1 ソウル日本人会役員一覧(1996年3月現在)	表3-2 ソウル日本商工会役員一覧(1970年)				
西暦	中華民国	昭和 平成	日僑協合理事長	日僑商工歴史代理理事長	日僑工商會理事長
名誉会長 山下新太郎 (大使) (三井物産)		50	高橋 書 (三菱商事)	前田秀陽 (DKB)	第1代 1973.11~ 中居松太郎 三井物産
会長 大橋信夫 (丸紅)		62	池田万蔵 (三井物産)	〃	第2代 1976.4~ 野口 能敏 東京銀行
副会長 高井 孝 (日本航空)		63	他田 覚 (三菱商事)	〃	第3代 1977.4~ 石井 利夫 三井物産
会計理事 上野秀樹 (富士銀行)	日本人学校運営副委員長	64	〃	〃	第4代 1979.4~ 服部 誠 三菱商事
理事 山本祐夫 (伊藤忠商事)	日本人学校運営委員長	65	〃	〃	第5代 1979.7~ 斎田 敏幸 日綿業商
〃 河本定雄 (兼松)		66	〃	〃	第6代 1979.11~ 東 忠 三菱商事
〃 伊藤幸生 (韓国メディアカルサブライ)		67	〃	〃	第7代 1980.4~ 龜崎 達也 三菱商事
〃 福田賢二 (三永インキペンベイト)		68	〃	〃	第8代 1981.4~ 安部 好郎 三井物産
〃 秋田敬三 (住友商事)	J.V. 副会長 ソウル日本商工会・ J.V. 副会長	69	〃	〃	第9代 1982.4~ 堀部 昌昭 伊藤忠商事
〃 大久保公雄 (トーマソン)		70	〃	〃	第10代 1984.4~ 今井 正明 プレンジョン・ エレクトロニクス (松下電器)
〃 百瀬 格 (西日本新聞)		71	〃	〃	第11代 1986.4~ 近藤 正弘 伊藤忠商事
〃 筒井博人 (ニチメン)		72	〃	〃	第12代 1987.12~ 鈴木 信二 三菱商事
〃 三宅通方 (日興證券)		73	〃	〃	第13代 1991.4~ 村田 等 プレンジョン・ エレクトロニクス (松下電器)
〃 宮城谷弘道 (日商岩井)		74	〃	〃	第14代 1992.6~ 徳永 謙之 フォーレーション
〃 高野紀元 (日本大使館)		76	〃	〃	第15代 1993.6~ 宮川 克己 三井物産
〃 武山芳治 (日本人学校)		77	〃	〃	第16代 1995.12~ 浅井壮一郎 ユニオン味の業
〃 田島崇男 (三菱銀行)	J.V. 会長	78	〃	〃	第17代 1997.4~ 島岡 忠臣 伊藤忠商事
〃 石川芳治 (三菱銀行)		79	〃	〃	第18代 1999.4~ 今城 進 RCBC (三和銀行)
〃 登石成二 (三菱商事)	ソウル日本商工会会長	80	〃	〃	第19代 2000.4~ 今城 進 RCBC (三和銀行)
〃 貝谷香江 (婦人部)		81	〃	〃	第20代 2000.5~ 亀山 祥一 三井物産
〃 細山裕子 (婦人部)		82	〃	〃	第21代 2003.4~ 川口 隆吉 丸紅フィリピン
〃 多和田裕行 (第一勧業銀行)		83	〃	〃	
〃 山本光洋 (東京銀行)		84	〃	〃	
		85	〃	〃	
		86	〃	〃	
		87	〃	〃	
		88	〃	〃	
		89	〃	〃	
		90	〃	〃	
		91	〃	〃	
		92	〃	〃	
		93	〃	〃	
		94	〃	〃	
		95	〃	〃	
		96	〃	〃	
		97	〃	〃	
		98	〃	〃	
		99	〃	〃	
		2000	〃	〃	
		01	〃	〃	
		02	〃	〃	
		03	〃	〃	
		04	〃	〃	
		05	〃	〃	
		06	〃	〃	
		07	〃	〃	

出所: 『ソウル日本人会誌 せうら』第91号, 1996年3月, 104頁より作成。

表3-2 ソウル日本商工会役員一覧(1970年)

役職	氏名	所属
会長	五月女年郎	(三菱商事)
副会長	木本栄成	(伊藤忠商事)
〃	鹿野正久	(東京銀行)
会計理事	舟橋健男	(三菱銀行)
副会長:	小野 豊	(丸紅飯田)
	藤田照男	(トーマソン)
	松本栄成	(伊藤忠商事)
	大野善広	(住友商事)

出所: 『會報』28頁より作成。

表3-4 フィリピン日本人商工会議所 会頭一覧

第1代 1973.11~	中居松太郎	三井物産
第2代 1976.4~	野口 能敏	東京銀行
第3代 1977.4~	石井 利夫	三井物産
第4代 1979.4~	服部 誠	三菱商事
第5代 1979.7~	斎田 敏幸	日綿業商
第6代 1979.11~	東 忠	三菱商事
第7代 1980.4~	龜崎 達也	三菱商事
第8代 1981.4~	安部 好郎	三井物産
第9代 1982.4~	堀部 昌昭	伊藤忠商事
第10代 1984.4~	今井 正明	プレジョン・ エレクトロニクス (松下電器)
第11代 1986.4~	近藤 正弘	伊藤忠商事
第12代 1987.12~	鈴木 信二	三菱商事
第13代 1991.4~	村田 等	プレジョン・ エレクトロニクス (松下電器)
第14代 1992.6~	徳永 謙之	フォーレーション
第15代 1993.6~	宮川 克己	三井物産
第16代 1995.12~	浅井壮一郎	ユニオン味の業
第17代 1997.4~	島岡 忠臣	伊藤忠商事
第18代 1999.4~	今城 進	RCBC (三和銀行)
第19代 2000.4~	今城 進	RCBC (三和銀行)
第20代 2000.5~	亀山 祥一	三井物産
第21代 2003.4~	川口 隆吉	丸紅フィリピン

出所: フィリピン日本人商工会議所『月報』No. 200, 2003年7月, 5頁。

出所: すべて、小林英夫、柴田善雅、吉田千之輔編『戦後アジアにおける日本人団体』ゆまに書房、2008年より重用。

や現地の日本人永住者が会頭になったという事例は一つもない。

日本人会は、日本人同士の親睦や交流、在留邦人のお墓や子弟の学校の管理をその主な業務としており、日本人商工会議所は、日系企業のビジネスの支援や情報交換、現地企業や政府との折衝を主な目的としている。いずれも大企業からの出向者が幹部を占めると同時に、その奥方達も親睦や交流の担い手として運営に参加している。ハツシバも商工会議所だけでなくマニラ日本人会の幹部メンバーだったことは間違いない。この会が出版している会報『まぶはい』（タガログ語で「ようこそ」の意味）の編集作業は、マニラ駐在の日本人社員夫人の手で担われている。おそらくハツシバ社員の夫人部隊もこれに参加したに相違ない。ハツシバ夫人部隊については、『島耕作』シリーズに登場する。ハツシバミセス会と称するもので、戸倉部長夫人の音頭とりでビレッジに住んでいるハツシバ駐在員と出向社員の妻（「駐妻」：駐在員妻）達の月2〜3回開かれる親睦会である。

会合の内容は、親睦と情報交換だが、樫村が出世頭で若くして本社部長のポストにあるためか、樫村夫人への戸倉部長夫人グループの受けは良くない。パーティに樫村夫人だけには内緒で皆が盛装して行って、何も知らずに普段着で来た彼女に恥ずかしい思いをさせていじめてやろうなどというたくらみを仕掛ける一幕があるのはその証左であろう。おそらく、こんな夫の会社の上下関係やそれと絡むねたみや嫉妬も織り込みながら夫人たちは、夫の出世に願を込めて日本人会の宣伝活動や分科会活動に参加しているのであろう。もっともこうした「駐妻」も近年では、結束力を弱め、多様な活動を展開してきているが、それに就いては後述しよう。

先ほど、日本人会の活動は親睦、墓や学校の管理だといったが、ビジネスを超えた日本人同士あるいは現地社会とのコミュニケーションに日本人会は活動の大きな時間を割いてきた。活動を見てみると日本人が主体のゴルフコンペ、盆踊り大会や歌舞伎、能鑑賞など日本の伝統文化の紹介の集い、現地有名人との交流など、多彩である。日本の芸能人や文化人を招待しての演芸会や講演会なども開催されている。しかし現地人がどの程度会員メンバーになっているかといえば、シンガポール日本人会で10%未満であり、マニラ日本人会は、名誉会員を除けば、皆無に近い⁽¹⁷⁾。

その意味では、日本の大使館の補助組織的色彩が濃厚である。もっとも筆者の現地取材に依れば、これは中国のある地域での商工会のケースだが、現地賛助会員の最大の目的は、日本人との交流にあるのではなく、会員名簿の取得が主たる目的だということだ⁽¹⁸⁾。したがって、彼らに懇親の効果を期待することは困難である。

6-2 増加する中小企業派

近年中小企業派がアジアで増加し始めている。日本食レストランやお土産店、ホテルのレセプションカウンターなどに多くの日本人の若者が勤務している。彼らに一様に共通する点は、彼らの多くはインターネット情報で就職活動を行い、そのルートで就職してきていることである。いまひとつは、ほとんどの若者が年金を支払っていないということだ。一言で言えば、実に安直に、日本を捨てて海外に来ているのである。このへんの軽さというか、フットワークの良さが彼らの持ち味でもあるのだ。

なかには、単なる従業員ではなく、当地で事業を行い、それ相応の成功を収めた若き実業者たちも少なくはない。たとえば上海で起業して活躍している日本人の若者たちがそれに該当する。いわゆる「和

僑」と呼ばれている面々である⁽¹⁹⁾。

製造業というよりは、どちらかといえばレストランやサービス業に従事している人が多い。彼らは、広い意味で、現地採用の「中小企業派」の範疇に所属する人々である。年齢的には圧倒的に若者が多い。西原理恵子や鴨志田穰の漫画の世界は、そうした彼らが主人公ということになる。彼らの『アジアパー伝』に登場する人物は、バンコクでは、スタジオカメラマンのミヤタさん、レストラン経営に失敗、バンコクを徘徊するカワツさん、何をしているかわからない胡散臭いタカハシさん、フリーカメラマンのハンダさん、みんな、主観的にはともあれ、客観的にはまともではない。もっとも主人公の鴨志田自身が、決してまともとはいえない自称フリーカメラマンとして当地にきているのだ⁽²⁰⁾。

ハンダは、一稼ぎしようとタカハシと鴨志田を誘って、ポルポトを探しにカンボジャ取材に出かけ、どたばた劇を演ずる⁽²¹⁾、カワツさんは、売れ残った魚の冷凍品の販売を鴨志田に押し付け、鴨志田は、半分腐れかかった冷凍魚を日本人仲間に売りさばくために奔走する⁽²²⁾。いずれにしても、胸を張って人に言える商売をしている連中とは程遠いのだ。

6-3 別組織を作る中小企業派

だから中小企業派は、大企業主体の日本人会に満ち足りず、別組織を作って活動するケースが増えてきている。いくつかの事例を紹介しよう。

まず『島耕作』シリーズで舞台となっているフィリピンの場合だが、ここには先ほど紹介したマニラ会が活動している。

マニラ会が発足したのは1984年7月のことだった。初代会長は、1925年単身フィリピンに渡り、その後戦後の一時期帰国した期間を除けば、一貫してフィリピンに滞在して活動を続け、2004年この地で死去した大沢清だった。彼はフィリピン日系社会における長老的存在であった。大沢は、駐在員中心のマニラ日本人会ともマニラ日本人学校とも関係を持たない在比定住日本人が増えてきている中で、彼自身もそうした日本人の代表格の1人なのだが、同類の日本人が親睦を深め、交流できる組織が必要だと考えて、マニラ会を結成したというのである⁽²³⁾。

この会の出発時点での会員数は約60名で、その後漸増の傾向にあるが、会員構成は、当初はマニラに個人で来て活動していた日本人を中心に、彼らの交流を目的にしていたが、次第に日本企業を退職、もしくはフィリピン女性との結婚（多くは再婚）を契機に渡比する中高年男性が増加してきている。マニラ会機関紙に掲載された会員紹介欄で42名の年齢、出身地、職業、フィリピン来訪の契機をみよう（表4参照）。

出身地は日本全土に及んでいて特定は出来ない。だが、2007年時点で年齢を見ると50歳以上が29名で、全体の69%と半数以上を占め、40歳以上にまで広げると40名と95%に達する。しかもフィリピン女性と結婚して当地に永住したと記したものは8名で20%となっている。もっとも、結婚していると明言したのが8名だ、ということで、「マニラ湾と比女性の美しさに魅せられて来訪」などと書いた元ボートレース選手まで含めると、おそらく半数以上に達するのではないか。また、彼らのフィリピンでの職業は、自由業、会社経営、市場調査、ビジネスコンサルタント、セミナー関連、旅行代理店、輸入・両替商などなど多様でまとめることは出来ない。強いて言えば、都市個人経営業者となろうか。

小林 英夫

表4 マニラ会会員動向

会員番号	質問事項	回答内容	会員番号	質問事項	回答内容
1	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1946年5月31日 千葉県 自由業 日本でやて行くのは難しいと思ひ、物価の安いフィリピンでの生活を考えた	22	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1935年9月6日 宮城県 セミナー関連 30年以上前に観光で来たことが契機に
2	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1964年12月1日 北海道 輸出入業 外国に出たい気持ちが強かったため	23	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1944年10月27日 神奈川県 不動産管理 結婚を約束した人と、1985年初めてフィリピンにきた
3	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1958年8月24日 — 100円ショップ準備中 南国での生活に対する憧れ	24	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1929年2月25日 岡山県 旅行代理店 フィリピンの女性と結婚
4	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1958年8月24日 東京都 車両販売、クラブ経営 フィリピンとの結婚	25	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1939年6月26日 北海道 気功 フィリピンに友をたよって
5	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1949年10月31日 長崎県 — 中古車販売のため	26	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1954年3月17日 広島県 輸入業 仕事の関係で
6	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1952年8月11日 東京都 日本式指圧及び本格的なマッサージと鍼の普及活動 貿易会社のビジデントとしてきた	27	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1956年6月12日 岐阜県 サービス業 フィリピンに行けば何とか生活できさるだろうと思ひで
7	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1952年6月20日 岐阜県 会社経営 ゼネコンとして市役所から仕事を受注し、仕上げ・施工・ビジネスを行うため	28	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1963年10月28日 神奈川県 メディア関係 86年マニラ湾で開催された日比親善対抗ボートレースに出場、比女性の美しさに魅せられたため
8	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1936年12月15日 長崎県 — パターン州のリマイに発電所建設のため約3年前来比	29	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1926年3月11日 東京都 医療機器販売 仕事の関係
9	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1939年2月8日 長野県 運送業手伝ひ 1991年妻を病で亡くした後、フィリピンへ	30	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1942年10月30日 熊本県 プロモーション事業 1989年結婚と同時に
10	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1958年3月27日 香川県 — 市場調査のため	31	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1942年7月17日 栃木県 蕎麦業 サイパンで妻と知り合い、1991年フィリピンへ
11	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1945年1月18日 山形県 — フィリピンの女性と結婚	32	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1930年6月30日 福島県 建築設計関係 ハワイ州立大学の教授からフィリピン国立大学の客員教授として
12	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1959年12月25日 新潟県 各種設備施工 友人の誘いでセブを旅行したことが契機で	33	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1956年1月27日 群馬県 日本語教師 美しい海と女性に魅せられたため
13	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1931年6月26日 愛知県 フィリピン工場で工場の生産管理に従事 パイオ関連事業のため	34	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1942年3月19日 兵庫県 三菱電機勤務 定年を迎えるに当たり、外国での生活を体験したくて
14	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1937年9月14日 愛知県 製靴業 人手不足を解消するため	35	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1930年2月5日 京都府 医師・農学博士 マルコス大統領と呼ばれて
15	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1939年7月5日 北海道 ビジネスコンサルタント 器材取引の駐在員としてミンダナオ島コタバト市に赴任	36	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1947年7月24日 群馬県 家畜の育成研究 仕事の関係でタレントのピックアップのため渡比
16	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1950年2月22日 新潟県 会社経営 商用のため	37	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1946年3月7日 神奈川県 会社経営 22年前ビジネスマンとして渡比
17	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1946年9月28日 北海道 元製紙会社勤務 50才で退社、どこか南国で一人暮らしをするという漠然とした決断	38	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1909年5月9日 東京都 元警視庁 1996年、フィリピンに
18	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1959年2月11日 千葉県 佐川急便店長 現地法人の強化に派遣されたため	39	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1933年12月10日 神奈川県 — 中近東在住時、1972年～1989年労働者派遣の仕事で渡比
19	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1963年4月18日 大分県 フジテレビ支局長 番組関係で転派員として	40	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1934年5月31日 座間市 産婆士木関係 県の要請で、フィリピン海域で拿捕された漁船調査のため渡比
20	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1935年1月30日 福島県 レストラン経営 フィリピンを拠点として、世界を股に翔けてみようと思つたため	41	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1954年9月30日 栃木県 — 商売のため
21	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1942年7月28日 大阪府 事務手伝ひ フィリピンの女性と出会ったのがきっかけ	42	生年月日 出身地 フィリピンでの職業 フィリピンに渡った理由	1937年11月11日 宮崎県 輸入業者 仕事の関係で

出所：『マニラ会会報』各号より作成。

同じ動きは台湾でも見られる。「フォルモサ在留邦人会」、「なでしこ会」、「居留問題を考える会」などがそれだ。「フォルモサ在留邦人会」の結成は1985年のことで、台湾で国際結婚した永住日本人50名をもって結成された。「なでしこ会」は、台湾人男性と結婚した日本人女性の会で、成立は1975年とふるいが、当初「大根の会」と称していたが、1985年に現在の名称に変更した。もっとも新しいのが「居留問題を考える会」で、発足は1998年のことで、外国籍配偶者の法的地位の改善を目的に結成された。これらの組織に共通するのは、既存の台湾日本人会やその商工会議所組織である「台北市日僑工商会」が吸収できない諸要求を掲げて結成された点にある。

6-4 弱体化する日本人会

従来日本人の活動の中心母体だった日本人会の求心力は、さまざまな類似団体の誕生に象徴されるように、このところ急速に弱まってきているのである。前述したように「さすらい派」代表の西原理恵子・鴨志田穰の『最後のアジアパー伝』には、バンコク日本人会が登場するが、それは自称ジャーナリストのハンダさんが、日本人会の紹介でターと呼ぶヤー（お手伝い）さんを雇ったからである。ヤーにも、英語・日本語が出来るトップクラスからタイ語しか出来ず、何のとりえもないボトムに至るまで、いろいろランクがあるが、信用を得たヤーは日本人会や現地日本人の紹介で、彼らの間を泳ぎまわる。ハンダさんが雇ったヤーはボトムで、だからというわけではないが、彼の留守中に有金5万バーツ（約17万円）を持ち逃げされている⁽²⁴⁾。ヤーが手引きすれば、単身赴任の日本人宅に空き巣に入る、強盗をするなどは何でもござれの状況となる。だからこそ、信用の置けるヤーは貴重な存在となるわけである。

もっともこのハンダさんを例外として、この一事を除くと、西原理恵子や鴨志田穰の漫画には日本人会や日本人商工会議所はほとんど登場しない。それは、そのはずで、彼女の書物に登場する日本人はいずれも怪しげな在留邦人であり、商売もカメラマン、フリージャーナリストなどもっともらしい名前は使っているが、実態は、その日暮らしの浮草稼業の「自由業」が圧倒的比率を占めている。彼らにとって、日本人会は関係のない存在なのである。第一、彼らの商売相手は日本人というよりは、どちらかといえば現地人中心だし、したがって日本人会の情報が有利な働きをするのは、ごくまれにお手伝いさんを雇うときか、日本からの「お偉いさん」が来訪した時だけで、あとはほとんど意味を成さないからである。

第二には、近年アジア地域に進出してきている日系企業は、すし屋だとかラーメン屋などの日本食レストランやソフトウェア企業で、特段政府折衝や現地有力者とのコネが必要というわけではなく、したがって、彼らは日本人会には入会しないものが多い。わざわざ会費を払うには、反対給付に得る情報は多くはないのだ。そもそも日本人会などは、裕福で余裕をもった大企業の駐在員の社交場の要素が強い。だから大企業の製造業など、原料や半製品を輸入し、現地ワーカーを使って製品を作り輸出する場合には、関税やストライキの処理をめぐる政府役人との折衝や、時と場合によっては、暗黙のうちに役所の規制で目こぼしを頂くなどの必要からこの手の団体は有効だが、ラーメン屋やレストランとなると、そうした折衝はマレだし、折衝よりは闇の中での談合のほうがはるかに効率的である。

第三に、だからこのところ日本人会の会員数は減少してきている。台湾日本人会やシンガポール日本人会の会員数は横ばいだし、香港日本人倶楽部の会員数は2000年代以降は減少傾向にある。とりわけ

個人会員数の減少が顕著である⁽²⁵⁾。

6-5 自立化する女性たち

そんななかで、最近アジアの日本人社会の「駐妻」のなかに静かな異変がおき始めているのだ。その異変とは、「駐妻」の独立、自立の動きである。かつての「駐妻」は、前述したハツシバミセス会のように、駐在会社の長の妻を中心に「駐妻」が結集し、夫の出世と子供の安全を守る「銃後の女戦士」としての活動が行われた。むろん、彼女らも日本国内とは異なり、現地人の女中たちを使うことで家事労働から解放されるわけだから、それなりの趣味や奉仕活動に専念することは認められていたし、また奨励されてもいた。多くは日本の伝統的芸能の普及だったり、現地の芸能や文化の学習や交流が中心だった。

しかし2000年代に入ると日本企業の「駐妻」の中にも変化が表れる。一つは、駐在社長の権限が弱化する中で「駐妻」たちのまとまりが弱まってきていることだ。各人がそれぞれ己の赴くままに活動を開始している事がある。いまひとつは、その延長線上にあるのだが、「駐妻」が「銃後の女戦士」から脱却して、「前線の女兵士」として事業を展開するものが出始めたことである。彼女らは、現地で土産物屋を開いたり、物産貿易会社を設立したりして社長に納まり、亭主そっちのけで事業活動を展開する勇敢なる「アマゾネス」へと変身したのである。亭主が帰国した後も現地に留まり事業を展開する者も少なくなく、「去るものは日々に疎し」で、離婚を迎えるケースも少なくないという。

しかし、こうした積極派女性の登場は、「駐妻」だけに限らない。この点で、島耕作シリーズもサラリーマン金太郎シリーズも的確に捉えているとはいえない。島耕作の場合の女性社員は、大半がノンキャリアの事務員として描かれ、優秀な才能を持っていても「寿退社」組として扱われ、彼の筋からは消えていくのだ。サラリーマン金太郎として例外ではない。しかし1985年の「男女雇用機会均等法」施行を契機に、さらには1990年代以降のグローバル化が追い風となって、女性の幹部登用が積極化してきている。これは、ごく最近の動向なのだが、島耕作や本宮ひろしの今後の漫画像に何らかの影響を与えるかもしれない。

6-6 日本人商工会議所

6-6-1 商工会議所の諸類型

表5において東アジアの日本人会、日本人商工会議所の設立年を一覧表にしておいた。

その出自は多様だが、強いて言えば、3つのタイプに分けることができる。

日本人商工会議所誕生の一つのパターンは、日本人会の法人組織が分離独立して出来てくる場合である。このパターンがもっとも多く、韓国、台湾、香港、フィリピン、タイ、シンガポール、マレーシアなど、比較的戦後早期に設立された団体がこれに該当する。

二つ目は、日本人会はなく、日本人商工会議所だけが存在する場合である。これは政治的理由で一国一団体しか認証されていない場合、地方では商工会議所だけが認証されている場合である。アジア各国の地方の商工会議所、北京、上海を除く中国各地の商工会などはこれに属する。三つ目は商工会議所が日本人会と合体して一体化しているケースで、ジャカルタジャパクラブがそれである。ジャカルタジャパクラブは1970年に設立されている。東南アジアの日本人団体のなかでは比較的遅い時期に設立されたのは、インドネシアの政治情勢が大きく影響している。一つは、日本とインドネシアの賠償交

表5 東アジア各国の日本人会と日本人商工会議所一覧

韓国	ソウル日本人会 (1966・2)	ソウル日本商工会 (1967・7)
台湾	台湾省日僑協会 (1961・8)	台北市日僑工商会 (1971・3)
香港	香港日本人倶楽部 (1955・7)	香港日本人商工会議所 (1969)
フィリピン	マニラ日本人会 (1976・5)	日本人商工会議所 (1973・11)
ベトナム (ホーチミン市)	ホーチミン日本商工会 (1994・4)	
タイ	日本人会 (1953・5)	バンコク日本人商工会議所 (1954・9)
マレーシア	クワラルンプール日本人会 (1963・7)	マレーシア日本人商工会議所 (1983・10)
シンガポール	日本人会 (1957)	日本人商工会議所 (1969)
インドネシア	ジャカルタジャパンクラブ (1970)	

出所：前掲『戦後アジアにおける日本人団体』第5章～第13章参照。

渉が遅滞し、日本企業のインドネシア進出が本格化したのが1960年代後半だったこと、1967年のスハルト体制の誕生と経済開発の本格化に伴い、日本企業と日本人在住者が増加した事が大きな理由の一つである。いま一つは、インドネシアでは、KADINと称される国内商工会議所以外の団体は承認されていないため、ジャパンクラブにという財団法人として登録された事がある。このクラブには邦人部と個人部があるが、法人部が商工会議所的な機能を、個人部が日本人会的機能を果たしているのである⁽²⁶⁾。

6-6-2 ロビー活動

日本人会と異なり日本人商工会議所の活動は、各部会ごとで情報交換やビジネスと絡んだロビー活動を展開している。部会は、大体が電子部会や自動車部会、鉄鋼部会や造船部会といったぐあいに産業別に分かれていて、活動を展開している。

筆者が疑問に思うのは、なぜこうしたロビー活動を展開するのに日本人以外の現地ビジネスマンを商工会議所のメンバーのなかに入れられないのか、ということである。必要に応じて特別会員としてメンバーに入れ、交渉の際に日本側に立った現地スポークスマンになってくれれば、交渉ごとが如何にスムーズに進むか、ということである。この点では、シンガポール日本人会が会友として現地スタッフを迎え入れている事例が紹介されているが、まだ、その人員は10%以下で、不十分だという⁽²⁷⁾。

6-6-3 商工会議所会頭選挙

商工会議所の役職ポストは、現地社会ではそれなりの重みを持つから日本人社会のなかでもそれ相応の者がならなければ格好がつかない。だから事実上理事ポストは「世襲制」に近いものになるし、大企業の出向者が歴代の会頭に就任する。大企業のなかでも、そのときに一番羽振りがいい企業が推薦されるわけで、逆に歴代の商工会議所会頭の出身企業名を見れば、そのときの現地ナンバーワン企業と業種が推察できるわけである。

だから選挙だとは言え、無風選挙が一般的で、有力者達の談合で決まる場合が大半で、あとは若干の根回しで済んでいたのである。日本的といえば日本的な典型的な村長選出選挙だったわけだ。

ところが、2004年のことだが、タイではちょいとしたハプニングが起きた。というのは、無風選挙をいいことに外来者達が多数立候補し猛烈な選挙活動を展開し、タイ日本人会の役員選挙に強風を吹き込んだのだ。むろん、彼らの試みは、新風を吹き込んだだけで終わったのだが、選挙のあり方に一石を投じたことだけは間違いない。

6-7 海外日本人の娯楽と非日常

6-7-1 ゴルフと事件

しかし日本のみならず海外日本人間のコミュニケーションの最大のイベントはゴルフ大会で、ゴルフコンペは、彼らの最大の関心事の一つである。『島耕作』シリーズにも『サラリーマン金太郎』シリーズにも共通して出てくるのは、このゴルフをめぐる話で、彼らの最大の共通娯楽はゴルフなのだ。逆に「さすらい派」の漫画には、ゴルフは登場しない。日本人のゴルフは、個人的趣味でプレーする場合もあるが、「さすらい派」には、金銭的にも時間的にもそんな余裕がないものが大半である。だから日本人（だけではないだろうが…）のゴルフはビジネスがらみが多いことを物語っている。だから、ことゴルフに関しては、企業規模も業界の違いも関係ないのだ。

ゴルフの話題は『島耕作』にもしばしば登場する。ゴルフを通じての親睦は、よくある筋書きだが、いつでも親睦だとは限らない。島が上海初芝の董事長時代のことだ。場所は上海浦東ゴルフ場でのこと。プレーの後ビールを飲みながら交わした会話は深刻である。

相手は初芝の下請で、中国に進出した水沢電子総経理の水沢修三。初芝が進める部品の現地調達のおりを受けて、製品の品質は良くても割高の日系の水沢の製品を廉価の現地製品に取り替えるため取引を中止したいという話だ。当初は日系製品の質が中国会社の製品を上回り重宝がられたわけだが、中国会社製の品質が向上するにつれてそれに取って代われ、やがては取引中止にいたるというわけである。

取引停止の申し渡しに水島は反論を試みる。「来いといったのは初芝ではないか」と。初芝は反論する。「言ったのは確かだが、なぜ初芝以外に他社払取をしなかったのか。技術が移転し中国企業が競争相手となることはあらかじめ言っておいたはず」。さらに初芝は追討をかける。「リスクは自己負担です」。水島はこれに反論するが力はない。あるのは恨み節だけである。「使い切った電池を捨てるように捨てるのですか」。「私たちを切って日本は生き残れますか。結局はあなたの方大企業に跳ね返るのですよ」。…ゴルフ場からの帰宅途中、水島は車の運転を誤って交通事故で死亡する。自殺か？ しかし、この手の会話は、かなりの普遍性をもって幾度となくすべての大企業と下請の間で交わされてきたせりふである。しかしこの会話に結論と終わりはない。あるのは、ただ結果だけである。

ゴルフ場は、海外での裕福な外国人を拉致して身代金を要求する事件の舞台になることもある。フィリピンでは島耕作と彼の上司の樫村がゴルフ場からの帰りに反政府ゲリラの襲撃を受けて樫村は死亡、島は胸部貫通銃創で一か月入院している。これは、島たちが労働組合幹部との折衝で対立したしこりが襲撃劇として仕組まれた結果なのだが、このイメージのバックには明らかに1986年11月にマニラ郊外のゴルフ場から「過激派」に拉致されて身代金を要求された三井物産マニラ支店長若王子信行の事件がある。彼は翌1987年3月無事救出されたが現地社会を震撼させたことははっきりしており、ビジネスとゴルフと拉致の連鎖をベースに、この事件での拉致の代りに、島の漫画では銃撃による日本人殺害のシナリオを組み立てたものと想定される。

実際筆者の小林英夫も1990年代初頭のフィリピン調査の際、バターン半島先端のマリベレス工業団地をしばしば訪問した⁽²⁸⁾が、当時はマニラ郊外に出ると国道沿いにゴルフ場が広がり、また道路のいた

るところにドラム缶でバリケードが設置され、政府の検問部隊がそこに詰めて反政府ゲリラ組織 NPA (新人民軍) の襲撃に備えていた。到着地のマリベレスでは、労働組合の赤旗が林立し、争議の真っ最中という企業が数社あった。工場訪問の際にも、ワーカーの鋭い視線を浴びた経験がある。したがって、ドライバーは夕暮れ前にマニラに帰るため午後 4 時にはマリベレスを出発したいと聞いて聞かず、しばしばインタビューを中断して帰らねばならなかったほどであった。少しでも出発が遅れると「危険手当」と称して倍の運賃を請求されることもあった。ドライバーには「私みたいな金もなく、彼らのうらみも買ってないものを襲うことはないよ」と言って聞かせたのだが、「あんたは日本人だから」と聞いて聞かず、法外な危険手当を要求する運転手も少なくなかった。

6-7-2 カラオケ・バー

『島耕作』シリーズでしばしば登場するのはカラオケ・バーである。数多く出てくるので、いちいち取り上げるほどではないが、典型例として、ハツンバフィリピンと初芝上海の事例を紹介しておくこととしよう。

ハツンバフィリピン。島がフィリピンに赴任した直後のことだが、単身来比した島に同僚がフィリピン女性を「紹介」する場面が登場する。その舞台となったところが、マニラのカラオケ屋を兼ねダンスショーで来客をもてなすフィリピンバブである。むろん島は、その「おせっかい」を断固断るのだが、おそらくそうした新人への「配慮」が日本人ビジネス社会では日常茶飯に行われていたのだろう。また、そうしたなかで、それをきっかけにずるずるとフィリピン女性との恋愛から同棲へと進むケースも少なからずあったものと想定される。事実『島耕作』でも日本でフィリピンバブのダンサーと知り合った島の同僚が、島のフィリピン行きを契機に、同僚と恋愛し帰国したダンサーへの「連絡」を島に依頼する場面が出てくる。島が訪ねると、彼女はスラムに住む子持ちの既婚者で、一家は彼女の細腕に頼って生活している事が判明する。彼女はまた島のマニラのマンションの隣室の日本人男性とも愛人関係を持っている。この複数不倫関係は、嫉妬に狂った彼女の夫の「殺人騒動」にまで発展するのだが、その話はいままでにしたい。が、実はこの手のトラブルはけっこう多かったのだと思う。

というのは、小林英夫自身も当時フィリピン調査をしていて、身近にしばしばこうしたケースを見聞したからだ。…場所はセブ島奥地の工業団地。全くの「陸の孤島」のような場所で、娯楽といえばゴルフくらいしかない。調査を終えた昼飯時のことだ。食堂の場所を聞いたところ、近場に適当な店がないから俺のうちに来い、という。その親切な言葉に乗って、そこから車で 15 分ほどの彼の宿舎に赴いた。彼には東京に住む妻と子供が在り、上の息子は大学受験で、当時私が勤めていた K 大学に入学させたいのだという。息子の受験の関係もあるので、こんな寂しいところに単身で赴任しているのだ、とも言っていた。うまい味噌汁や焼き魚を食わせてもらって、いろいろ大学入試の事情などが話題になった。久々に飲む日本のビールが軽い酔いを誘う。午後の南国のゆったりとした風のなかでうっとりした気分になりながらも、一つ気になる事が頭を離れない。それは、彼の背後の本棚の上に置かれていた一枚の写真だ。若いフィリピン女性とその子供と思われる赤ちゃんが納まっている。一見、幸せそうな一葉だが、何か引っかかるものを感じてなぜか酔い切れない。なんとなくその赤ん坊の顔つきが彼に似ているのだ。「トイレを貸してくれ」と断って、左右にいくつかの部屋が並ぶ廊下の突き当たりまで行って、

ひょいと右の開け放たれた部屋を見てもなしに見ると、くだんの女性が赤ん坊をあやしているではないか。軽い酔いのなかで、そうだ、赤ちゃんつきのメイドを雇っているんだ、と言い聞かせて席に戻ったが…。「このたび帰国いたしました」という挨拶状を戴いたのは、その1年後のことだった。正妻の待つ日本に帰ったら、あの女性と赤ちゃんはどうなったのだろう…。

初芝上海。島が取締役で上海初芝電産董事長として現地に派遣された時のことだ。島が九州に赴任していたとき知り合いだったクラブママのチャコが上海にワインバー“女狐”を開店していたのだ。彼女は、欧州のワイン業者ロバート・ベーカーと中国投資会社上海青花集団との共同出資で事業を始めたのだという。彼女とベーカーで60%、青花集団が残りの40%を出資しているという。上海青花集団というのは名うてのヤクザ組織で、柳燕生をトップに合併を仕掛けた上で、乗っ取りを図るハイエナ集団である。チャコはその魔の手にかかったという筋書きである。おまけに柳の手引きでベーカーもチャコも麻薬漬けになっている。島が、命がけでチャコを説得、麻薬と事業から手を引かせるというのだが、かつての阿片魔窟都市・上海の「遺産」を引きずって、けっこうこうした話は枚挙に暇がなかったのだと思う。

フィリピン・中国ともパブストーリーという点では共通なのだが、お国柄を反映して中比でその扱いが異なる点が興味深い。フィリピンでは、愛の場面として語られ、中国では愛プラスビジネスの場面として語られる。フィリピンでは日本人の男性とフィリピンの女性の関係として語られ、中国では、それプラスアルファでビジネスを通じた日本人女性と中国人男性の関係が語られるのだ。

6-7-3 犯罪

『島耕作』シリーズにもゴルフ場銃撃事件以外にもマンション殺人事件やマフィア仲間割れ殺人事件など数多くの犯罪事件が登場するが、小林英夫自身もミステリーじみた犯罪事件を経験している。その点でいまだから語れる話を一つ。1980年代半ばの、まだK大学の「若手」教授だった時のこと。東南アジア企業調査に没頭し、旅費捻出の非常勤を含めて週14コマの超過密スケジュールをぬって毎月2回か3回海外調査に出かけていた（スケジュールは、きっかり一週間。機内持ち込みバッグ1つの軽量で、いかにぎりぎりまで空港に到着し飛行機に乗るかを研究したのもそのときだ。空港到着2時間前などというのは論外で、出発30分前に空港に到着して無事に機上に滑り込むにはどうすればいいか、などという馬鹿げた工夫と実践に力を注いでいた）。授業期間中なのにあまり頻繁に海外に出かけるので、詮索好きの同僚大学ツバメたちが「小林は東南アジア某国に愛人を囲っている」と話を捏造し、一時期それをネタに盛んにさえずっていたほどだ。むろん無視したが…。

そんな折のフィリピン調査での出来事を語ろう。いつものようにギリギリの日程で調査を終えて朝一番のフライトでマニラからシンガポールに飛ばねばならなかった時のこと、確か朝4時おきでチェックアウトせねばならなかったと記憶する。南国とはいえ、ホテル内は薄暗く廊下は人通りのない道路のような感じだった。エレベーターで降りてフロントに出ると運転手のフランク〈本名は知らない。調査中彼をホテルドライバーとして日決めで雇用していた〉が友人と私に背を向けて話していた。さして気にもとめず、セーフティーボックスを開け、パスポートやお金を持って部屋に戻ろうとしたそのときだ。私がエレベーターの「閉」のボタンを押したとき、突然フランクと話していた男がエレベーターめがけ

て走りこんできた。とっさに私は、彼を入れてあげたいと思い「開」のボタンを押したつもりが、「閉」を押したためドアが閉まり、彼は私の眼前から消えて、私は何事もなく部屋に戻った。戻ってドアの鍵を閉めてから、私は言いようのない恐怖に取り付かれて椅子にへたり込んだ。私の眼前から消えた彼の眼が忘れられなかったからだ。それは間違いなく殺人者の眼だった。私が早朝早くホテルを出ること、私が、荷物のパッキングの前にセーフティボックスから貴重品を取り出す癖があること、そして今回もそれをやるであろうこと、そうしたことを知ってるのはフランクだけである。そういえば、前日夜別れる前に、彼はしきりと私のフライトタイムを確認していた。〈彼のしつこい質問を私は、ドライバーとしての彼の役職上の必要からだとばかり思っていた。たしかに彼は運転中日本のヤクザに知り合いがいるといていたが、私は気に止めていなかった。時たま料金上のトラブルが起これると、彼はブチ切れて料金表をハンドルにたたきつけるなど粗暴な点が気にはなっていたが…。しかし次回からは彼と契約するのはやめよう、ぐらいにしか考えていなかった〉もし私が「開」を押してくだんの男が中に入りドアが閉まり、そして2人だけのエレベーター密室が出来ていたとしたら。私はどうなっていたのだろうか？“好餌ござんなれ”とばかり殺されたか、さもなければ、脅迫されて金品を巻き上げられたか。いずれのシナリオが出来ていたのかは、今となっては、神ならぬ身、知る由もない…。今でも夜中に夢の中にある男の眼が現れ、私は絶叫して飛び起きる事があるのだ。

7 企業経営

7-1 日本人社長とアジアの社長

島は結局社長の座まで上り詰める。しかし社長とはいっても、所詮は日本の場合はサラリーマンの雇われ社長で、せいぜい広いオフィスと秘書、多少贅沢な住宅、加えて都内某所の隠れマンションの一室が保障されるだけで、一般社員に毛が生えた程度の生活が楽しめるにすぎない。島耕作を見ていると、課長時代や離婚直後の自宅は登場するが、社長時代の家屋や自宅は漫画に出てこないで定かではない。サラリーマン金太郎、西原理恵子・鴨志田穰の日本での生活や自宅の規模も漫画に登場しないので不明である。島耕作を含めて彼らはいずれも秘書も連れずに海外を旅行している状況から察すると、その生活は一般の社員のなかで多少恵まれている層に所属しているにすぎない。

ところが、アジア地域の社長となるとオーナー社長が多いからだが、その豪勢さは桁違いである。島の漫画にはフィリピンの富豪のセルバンテス財閥の豪邸と中国の出発集団トップの孫鋭の別荘が登場する。

マカティ地区ビレッジ内のマリオ・セレバンテス邸。ここで開かれる仮面舞踏会に島耕作も潜入、出席している。広大な敷地と壮大な建物、そしてプールサイドに広がるゴージャスな庭園。そこで繰り広げられる、退廃を含んだ甘いパーティ。これは島の日常生活のレベルを数段超えている。

出発集団のCEO 孫鋭の場合だが、彼も蘇州近郊に別荘を持っていて、同僚をパーティに招待している。それは中国近代の王朝、清の時代の高官の持ち家だったものを孫が買い取ったものである。彼は、そこで島耕作の旧友で上司の初芝社長・会長・相談役の大泉裕介の愛人だった馬島典子との恋人宣言をやって島耕作を驚かすわけだが、そのやり方たるや、典子の前の愛人大泉裕介との隠微な関係と比較す

ると、はるかに明るく公然としているし、大泉の隠れマンションと比較すると孫の豪邸は、清王朝の宴会を再現したようで、比較にならないほどゴージャスである。

7-2 日本の常識からの脱却

日本の常識から如何に脱却するか、がグローバル化したビジネス社会では決定的に重要である。この点では、『島耕作』シリーズも『サラリーマン金太郎』の世界も西原理恵子・鴨志田穰の漫画界も同一で、いずれも複雑な人間関係が縦糸なら脱日本人的常識が横糸をなしてストーリーが織られている。

島耕作シリーズの場合には随所にストレートにそれが出てくる。フィリピンでは、日本の常識で作られた冷蔵庫が全く売れなかったのに、従業員のアイデアを取り入れて作り直したら爆発的に売れた話や、中国では思い切って系列関係を断ち切って商品生産を押し進めるとか、賃金制度を完全実績主義に切り替えるとか、日本の常識からの脱却を試みている。

島の場合は素直だが、サラリーマン金太郎シリーズは、やや複雑だ。日本の常識を堅持する形で、実はその見せ場を異なるアングルに置き換えることで実質的に日本の常識を捨てるという手の込んだ手法を見せている。たとえば、言うことを聞かない相手に柔道、空手の手法をデモして彼に要求を飲ませるといった件はその一例であろう。

西原・鴨志田にいたっては、最初から脱日本的常識で始まっているのだ。この行き当たりばったりの生活そのものが脱日本的常識を地で行っているといつてよい。まずは、脱日本だ。彼らは日本とは完全に切れている。むろん帰国することはあるが、それは食い扶持稼ぎか逃亡の対象地であって、それ以上でも以下でもないのだ。第二は脱組織という点がある。彼らは組織に依存しない。一匹狼といえば聞こえは良いが、要は根無し草なのである。日本人とのお付き合いがあることはあるが、日本人である必然性はない。たまたま日本人だった、というだけである。第三に日本人の海外生活の常識としての「治安の良し悪し」という言葉に表現される「安全性」への配慮の欠如である。普通の日本人的常識から判断すれば二の足を踏むような危険地域—たとえばアジアではカンボジャ、東欧ではコソボなど—にも彼らは比較的平気で突入するのだ。銃弾が飛び交うなかでもあまり躊躇せずに進んでいく。もっとも彼らの生業が「ジャーナリスト」や「事件トップ屋」であれば特種目当てにそうした行動をとること自体不思議ではない、といえはその通りなのだが。

7-3 優位性の模索

こうしたなかで、彼らが絶えず追求しているものは国際優位性の模索である。中国でもインドでも優位性の模索は続く。それをもっとも追求したのが島耕作シリーズだ。

上海発芝の董事長に就任した島耕作が最初に直面した問題は、初芝電気製品が中国市場で競争力を失っているという厳しい現実だった。ローカル製品より3割から5割がた初芝製品は割高だというのだ。しかも品質的にはさほどの差はないというのだ。島耕作は、思い切った対策を打ち出すこととなる。一つは開発センターの中国移駐である。開発センターには最先端技術が集積されている。それが中国へ移転するということは、最先端技術が中国へ流出する恐れを多分にもつ。しかし、中国市場向けの製品を安く生産するには、まず開発センターを中国に移すということは間違った戦略ではない。次に上部の指示もあったのだろうが、中国家電業界の先頭グループを走る出発集団との販売提携である。これも中

国市場でブランドを確立するためには不可欠な手であるといっても間違いはない。さらには、製品コストの削減のためにより安く部品を供給してくれる中国ローカル企業部品の活用である。これは、別の言い方をすれば、中国に初芝のために随伴進出した日系部品メーカーを切ることである。この点は、すでに前述した。そして、最後に残された手は中国側が生産できていない電子デバイス製品を一元的に出発集団に供給することである。出発集団の電気製品が売れば、自動的に初芝のデバイス製品も売れるという寸法である。日本企業の生きる道は、結局高品質の部品を最終セットメーカーである中国企業に提供しパーツメーカーの道に活路を見出すことなのだ。この点を丸川知雄は日本企業が最終製品からその基幹部品まで中国で生産している「垂直統合志向」に対して、ハイアール（海爾）は、基幹部品を外部からの購入に依存する「垂直分裂志向」だと称しているが、島の戦略は、その中国の「垂直分裂志向」に合わせたものだということができよう⁽²⁹⁾。

島耕作は、インドでも同様の経験をしている。今度の相手は、インドに後発で進出し、あっという間にシェアを拡大した韓国家電企業との比較優位の競争である。1990年代後半インドに進出したサムスン（島の漫画ではソムサム）とLG（同PG）が、短期間で急速にそのシェアを伸ばしたのである。その理由を島耕作は「最先端の技術」を導入し、現地のメーカーを使って、現地並みのコストで生産し、「日系家電全社の10倍の金額」を宣伝費に投入しブランド力を強化し、「インド人を使って研究開発しインド人の管理者を登用した」というのである。つまりは最新技術と現地化のドッキングで高級な廉価製品を生産したというわけである。しかも顧客ターゲットを富裕層に絞った日系企業とは対照的に全階層を狙って全面展開したというのである⁽³⁰⁾。

（続）

注

- (14) 30周年行事委員会記念誌係編『マニラ日本人学校創立30周年記念誌』1998年、86頁。
- (15) 前掲『マニラ日本人学校創立30周年記念誌』。
- (16) 『マニラ会』第156号、1999年3月1日。
- (17) 前掲『戦後アジアにおける日本人団体』438頁。
- (18) 2008年12月25日 中国広東省J市でのヒヤリングから。
- (19) 渡辺賢一『和僑』アスペクト、2007年、須藤みか『上海ジャパニーズ』講談社、2007年。
- (20) 前掲『アジアパー伝』。
- (21) 同上。
- (22) 前掲『最後のアジアパー伝』第4話参照。
- (23) 大沢清『フィリピン邦人社会の戦前・戦中・戦後』びくす社、1994年、369-370頁。
- (24) 前掲『最後のアジアパー伝』64頁以下参照。
- (25) 前掲『戦後アジアにおける日本人団体』第7章参照。
- (26) 前掲『戦後アジアにおける日本人団体』456頁。
- (27) 前掲『戦後アジアにおける日本人団体』第12章参照。
- (28) その調査結果に関しては前掲『東南アジアの日系企業』参照。
- (29) 丸川知雄『現代中国の産業』中公新書、2007年参照。
- (30) インドでの家電製品の販売状況と韓国企業の戦略に関しては、榊原英輔・吉越哲雄『インド 巨大市場を読みとく』東洋経済新報社、2005年、小林英夫『BRICsの底力』筑摩新書、2008年参照。